

---

# GEASSRECORD - ギアスの生まれた日 -

死神帝国

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GEASSRECORD - ギアスの生まれた日 -

### 【Nコード】

N33540

### 【作者名】

死神帝国

### 【あらすじ】

時は約5000年前・・・ギアスが生まれた。一人の男の手によって・・・

ギアスにより起きていく出来事・変わっていく人々。

そんなギアスが生まれた理由とは・・・

GEASSRECORD・・・刮目せよ本当の記録を・・・

RECORD 1 (前書き)

目録せよ . . . . 真のギアスを . . .

## RECORD 1

ギアス・・・それは、「王の力」と呼ばれる特殊能力  
この力は、遙か昔に一人の男が生み出した。

ギアスの誕生は、今から約5000年ほど前に遡る。

男の名は、ケルディム

当時は、生活するのめんどくさいくらい貧しかった。

そんな中、盗んでは追われの繰り返し日々

そして、そんな生活も終わりを告げようとしていた・・・死という  
形で

いつものように追われていると一人の少女が手招きをしている。  
少年は少女がいるほうへ走った。しかし、そこに少女の姿は無かつ  
た。

なんで・・・さっきまではここにいた筈なのに、焦りが思考を狂わ  
せる。

気が付くとあつという間に追いつかれてしまった。

やばい・・・逃げないと、と思うより先に囲まれてしまった。

俺、ここで死ぬのか？・・・ハハッ、ハハハッ、狂いすぎて笑いが  
出てきてしまう。

体に力が入らない、本当に死んでしまうのか？そう考えただけで涙  
が出てくる。

止まらない涙、拭いても拭いても止まらない・・・死ぬのが怖い・・・  
死にたくない

震えも涙も止まらない、もうどうしたらいいかも分からない。

もうだめだ・・・でも、死にたくない・・・あいつに・・・あいつに  
会いたい

そんな窮地の中で母の様な優しい温もりが体中を包み込んだような

気がした。

「汝、チカラを欲するのか？」

どこからか声がした。母に似た声だ。声のするほうへ振り向くとそこには、少女がいた。

あのときの少女が何でここに……さっきはいなかったのに……どうして何処に

「チカラを欲するのかと聞いているのだ」

驚きのあまり思考が追いつかないが何とか声を出す。

「俺、確か襲われて……ってここどこ？」

目の前に広がっていたのは、果てしなく続く虚無の空間だった。

「私のチカラにより発生した別次元の空間だ。」

別次元といわれてさらに思考が追いつかなくなる。

「私のチカラは、ヒトの心の中に入って会話が出来るといっものだ、つまり

ここはお前の心の中ということになる。」

「そんないきなり言われても……」

「詳しいことは後だ今はチカラが欲しいか聞いている。」

「欲しい」

迷いながらもそう思った。

「迷うな、チカラが欲しいのか」

「欲しい、生きる．．．．．生きるチカラが欲しい」

そのときの俺に迷いは無かった。

## RECORD 1 (後書き)

どうだったでしょうか？

2話を書くときの参考にもさせていただきたいので感想や御意見がありましたら宜しく願います。

RECORD 2 (前書き)

明かされるほんの少しの過去

## RECORD 2

5年前、母と初めて遠くに出かけた。  
果てしなく広がる草原で母の愛情たっぷりの弁当も食べた。

「おいしい?」

「うん、とっても美味しいよ母さん」

「よかったわ、そんなに喜んでくれて。母さんも嬉しくなってきた  
やった」

これが母と交わした最後の言葉だったかもしれない。  
こんなに楽しい母との日々も長くは続かなかった……

弁当を食べ終わってから一本の大きな桜のところへ行こうというこ  
とになった。

そのときの母の顔はとっても嬉しそうだった。  
だけど、今までで一番悲しそうだった。

桜の木の下へ着いた……そのときだった。  
一瞬の出来事だった。本当にあっという間だった。  
母が変な機械に捕まっていた。助けないと……  
しかし、足が思うように動いてくれない。

「くそっ……動けよ……動けよ俺の足」

震えが止まらない。どうする……どうする俺……どうすればいい  
分からない……声もかすれていた。

機械が動いた。背中から巨大な剣を取り出した。

「やめろおおおおおおお」

母に向かってそれを突き刺した。何の躊躇も無く。

俺の顔には真っ赤な母の血が着いていた。

母は、桜の木に背を預けて胸を剣で貫かれていた。

「おい．．．嘘だろ．．．嘘だつて言ってくれよ」

母が目の前でいきなり刺された。そんな現実をすぐに受け止められなかった。

俺は、機械を睨んだ。しかし、機械を壊せるわけでもない無い。

そんなことは分かっていた。現実から逃げてるってわかってる。

でも、俺には未だに信じられない．．．母が目の前で死んだことは。

「キサマノモトメルチカラハナンダ」

そう告げて、機械は真っ赤な夕日に向かって飛び去った。

「俺の求めるチカラ．．．」

そのときの俺は、母に対しての悲しみと機械に対しての憎しみで一杯だった。

だけど、俺は笑っていた。狂っていたのかもしれない。

そんなことはもうどうでもいい。

俺は、そっと母の近くによって頬に軽くキスをした。

「母さん、行ってくる。母さんがくれた贈り物探しに．．．」

俺は、笑っていた。でも涙だけは止まらなかった。  
止められなかった。．．母がいない俺は、ただの弱い子供だ。  
泣き続けた．．ずっと．．ずっと．．失った母さんを求めて  
．．．．

母さんに最後の別れを告げて、桜の木を見上げた。

その夜、母との思い出の夢を見た。そこで母は一枚の手紙を置いて  
いった。

その手紙を開け、読んでいく。

そして俺は、最後の文章をじっくりみていた。

これが母の死と関係があるのだとなんとなく思った。

そこには、こんな単語が書いてあった。

Lancelot heavens star  
g . . . e . . . a . . .

紅蓮極式・神

最後の単語はところどころが抜けていて読み取れなかった。  
そこで夢は終わった。

と同時に現実に取り戻される。

俺は、チカラと聞いて過去を思い出してしまったようだ。

もう戻ってこないものをいつまでも追い続けても仕方が無い。

「やるしかないな」

と一歩踏み出そうとしたとき

「今のお前にチカラは使いこなせない」

少女は、冷たい瞳を向けてそういった。

「今．．．なんていった」

「何度も言わせるな。今のお前には無理だといったただけだ」

なんで．．．なんで無理なんだ。

そんなのやってみないと分からないはず．．．．なのに．．．何  
で？

「お前は過去にまだ未練が残っている」

「なっ．．．俺は過去に未練は残っていない」

「本当にそうなのか？ついさっきまで思い出していたんじゃないの  
か。

母親との過去を」

こいつ．．．人の過去を知りもしないでよく言えるなそんなこと。  
と、言おうとしたが実際のところは当たっている。  
だから、うまく反論できない。

「そろそろ時間だな。帰らせてもらおう」

そして、一瞬にして虚無の空間から開放された。

途端に頭痛がしてきた。だんだん痛みが増してきた。  
痛い．．．痛い．．．くそお、動けねえ。

「よくここまで堪えられたな。これも母のおかげか」

「うるさいっ、お前に俺の何が分かる」

痛みも忘れ、唐突に叫んでいた。自分でも実感が無かった。過去に未練は無いはずなのに．．．母のことを言われるとなんだか苦しくなってくる。

「私は、お前の全てを知っている。なぜならお前に．．．」

なんだ．．．その次を言ってくれよ。言ってくれなきゃ分らないだらう？

途端に、また頭痛が激しくなってきた。もう反論できない。意識が遠のいてくる。くそっ．．．もうだめだ。

「私は、もう行く。またどこか出会えるといいな。お前みたいな奴久しぶりだ」

「待ってくれ．．．俺も一緒に．．．連れて行ってくれ。頼む」

俺の言葉を無視して少女は去っていった。もう．．．意識．．．が．．．いつの間にか周りを囲んでいた奴らは消えていた。薄れゆく意識の中でふと呟いた。

「名前．．．聞いておけばよかったな」

最後の最後にそんなことを呟く俺が本当に悔しかった。とても、とても悔しいはずなのになぜかとても寂しかった。意識が途切れる直前、俺の頬に一筋の涙が零れた。

## RECORD 2 (後書き)

2話どうでしたか？これからどんどんチカラについて書いていきたいと思っています。

3話もがんばりたいと思います。

もちろん、感想等もお待ちしております。

RECORD 2・5(前書き)

これから起こる出来事・・・主人公の謎

雨が降っていた、大量の雨が髪を濡らす。

「お前、死んでしまったのか」

黄緑色の髪の少女は、彼に話しかけた。  
が、彼から返答は無かった。

そのとき、彼の左目から鳥の紋章のような赤い光が放たれた。

「くっ」

少女は、光から目をそらした。そして、目を開けたときには見知らぬ空間にいた。

「ここは、どこだ？」

「ここは、私が創った空間だ……ギアスによってな」

振り向くとそこには黒い仮面とマントを着た男が立っていた。  
こいつ……誰だ？というような顔で少女は男を睨んだ。  
すると男は唐突に語りだした。

「こいつの本当の名は神咲ルル<sup>かんさき</sup>。そして、私のギアスを継ぐものだ」

「ギアスを継ぐもの？悪いがこいつにギアスを与えたのは私だ」

少女は、反抗的な口調で言った。

しかし、男は

「何を言っているのだ、あの時、私は“記憶を書き換える力”でお前の記憶の一部を削り偽りの記憶を埋め込んだ。

その記憶は．．．神咲ルルにギアスを使わせるのがお前の使命だという偽りを植えつけた」

「そんなはずは無い。私は、確かにこの手で．．．」

男は、余裕の表情で語りを続けた。

「契約をしていないお前はただの奴隷だ。お前に俺のギアスをひとつ分けてやる」

男は、少女に近付き手を差し伸べた。少女は、迷わずに言った。

「私に、ギアスを分ける。愛される力を」

「よかろう。しかし条件が3つある」

「なんだ？」

「1つめ、神咲ルルと共に残る2つのギアスを見つけ、神咲ルルに記録させる。

2つめ、神咲ルルと共に40日後に起こる“ギアス戦争”を止める。そして．．．．．」

最後の条件を言う前に少女が制止した。

「ギアス戦争とは何だ？それに、40日後？なぜ分かるんだ」

「私のギアスは、全てのギアスを記録し使うことが出来る。そして、  
“未来線を読むギアス”を使い

未来を見た所40日後にギアス戦争が起こることがわかった。ギアス戦争とは、ギアスを使いギアスを もつ者同士があらゆる手段を使って自分以外を消す戦争だ」

「しかし、残りは2つなんだろう？」

男は、少し黙った後、

「残りの2つがある限り戦争は起きる。

残りの2つの内1つは、ギアスではなく“他者にギアスを与える力”もう1つは、こいつの持つてる “全てのギアスを記録する力”だ」

「ということはまさか……最後の条件は……」

「そう。全てを記録した後、こいつを殺しギアスを消滅させる」

少女は、黙っていた。何も言い返せなかった、途端に涙があふれてきた。

なぜ私から全てを奪っていくのだろう。私と一緒に過ごしたものはなぜ消えていくのだろう。

「そろそろ時間だ。また、詳しいことが聞きたいときは俺を呼んでくれ。

ただし、こいつが寝ているときだけだ」

少女の額に鳥のような赤い紋章が浮かんだ。

「こいつがギアスだ」

ギアスをもらえた喜びより何もかも奪われていく悲しみのほうが大きかった。

少女は、泣きながら叫んだ。

「私から・・・何もかも奪っていくな」

「渡したギアスをうまく使えばこいつだけは救えるかもな」

少女は、このとき決心した。絶対にルルを救うと・・・

「我が名はゼロ、ギアスの最初で最後の創造者だ」

気が付けば、またもといたところに戻っていた。

雨が降っていた、大量の雨が髪を濡らす。

黄緑色の髪の少女は、空間に入る前より大きくなっていた。まるで成長したみたいにな・・・

「さてこいつをどうするか？」

「あれ？こんなところでどうしたの姉さん」

振り返るとそこには、見慣れた服を着た少女がいた。そこにいたのは、妹だった。

「私の家においでよ。その人も一緒に」

妹の家に着いた私は、もう一度心の中で強く決心した。  
ルルを・・・守ると・・・

そして、私はルルの寝ている部屋の扉を開けた。

## RECORD 2・5 (後書き)

今回は、RECORD 3に続く話です。  
次回も頑張っていきたいと思えます。  
感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3354o/>

---

GEASSRECORD - ギアスの生まれた日 -

2011年11月16日19時23分発行